

シンポジウム

『SGU 調査系科目の現状と課題
—— 課題の共有と発見に向けて ——』
企画のねらい

The Aim of the Symposium

大國 充彦

本シンポジウムは第25回「社会と情報に関するシンポジウム」として、2015年11月21日に札幌学院大学で開催した。「社会と情報に関するシンポジウム」は社会情報学部（注）のシンポジウムであり、この回が最後となる。シンポジウムの目的は、従来、学外の第一線の研究者の方々をお招きし、ご講演いただき、質疑を交えて、学部の研究アクティビティの向上に結びつけることだった。最後の回のあたり、初めて学内の方をお招きすることになったのは、次の意図がある。大学という組織・機構の主要な目的の一つに地域との関係がある。地域貢献・地域連携は、大学という「知の銀行」のフィールドである。研究者たちはキャンパスの外に出て地域の現場に入っていく。このダイナミズムは今に始まったことではなく、研究という営みが当初から持っている側面に過ぎないとも言える。大学が置かれたこのような状況の中で、社会情報学部としての役割もまたかわっている。社会情報学部の教育のコアに情報系と調査系がある。「社会調査」に関しては、社会情報学部だけではなく、本学の各学部でも行われている。しかし、学部相互でお互いの社会調査・社会調査教育の状況は共有されていない。社会調査やフィールドワークを担当する教員は多数いる

ため、簡単に状況の共有ができないことはもちろんである。けれども、共有に向けた試み、その第一歩が踏み出されていないことも、シンポジウム開催当時では確かなことだった。

社会調査教育の場面を焦点化し、そこでの課題を発見・共有するというテーマを設定した。調査系の科目では、学生を学外に連れて行き、そこでデータを収集し持ち帰る。集めたデータを分析し考察を加え、調査報告書を作成する。このような枠組は、学部が異なってもほぼ同じと推測できる。その上で、シンポジウムの企画に、3つのポイントを設けることとした。1点目は学生教育である。学外に学生を連れて行くというスタイルは、教室で講義を行ったり、議論を交わすのとは異なるものである。学外における教育の意味合いを掘り下げ、明確にするという課題の設定ができる。また、フィールドワークや聞き取り調査では、地域に出て行くことになる。われわれ大学人が入っていくことによって、その地域がどのように変化するのか。地域貢献・地域連携という側面でクローズアップされるポイントが、この2番目の点である。大学の地域貢献・地域連携のなかで、社会調査が担うことができる役割はどのようなものなのかという課題である。3点目は、学生は調査やフィールドワークをこれから学ぼうとしている。そのような学生を指導することが、

OHKUNI Atsuhiko 札幌学院大学社会情報学部・経済学部

研究あるいは研究方法といった領域にどのようなフィードバックがあるのかという研究面での課題を考えて行くことが3点目のポイントとしてある。

ご講演を依頼した方々には、教育・地域と大学の関係、研究という3つのポイントを含めた趣旨をお伝えし、それぞれ調査系科目を担当する際の主題、担当したことで見えてくる課題について自由にご報告いただくようお願いした。

第1 講演：経営学部における調査系科目展開の一事例

～商学調査実習から地域貢献プロジェクト実践へ～

山本 純（経営学部経営学科）

第2 講演：地域経済分析とフィールドワーク～大学が求められる地域貢献とは？～

佐々木 達（経済学部）

第3 講演：学生による社会調査の現状と課題～置戸町「フィールドワーク」について～

木戸 功（人文学部人間科学科）

第4 講演：社会情報学部『量的調査設計・量的調査演習』の現状と課題

～仮説検証型による探索的な社会理解～

高田 洋（社会情報学部）

コメント

太田 清澄（社会情報学部）

以下に記録された実践は、札幌学院大学と地域との関係のあり方の一側面である。これらの多様な活動を集約し、大学の目的をより明確化し、地域との関係が持つ意味を掘り下げていく必要がある。グローバルな展開がある一方で、ローカルあるいはリージョナルな営為を捉え返していくバランスが肝要となる。

シンポジウムには多くの参加者があり、有意義な質問・意見が数多く提起された。発言いただいた参加者の氏名と所属をここに記し感謝したい。平澤亨輔（経済学部・大学院地域マネジメント研究科長）、中村永友（経済学部・総合研究所長）、北林雅志（経営学部・学部長）、桜井道夫、佐藤和洋、森田彦、小池英勝（以上、社会情報学部）。

札幌学院大学では、シンポジウムにかかわった研究者以外にも多くの研究者が、今日も地域との関係を構築している。2016年4月には、札幌学院大学総合研究所に地域連携特設部会が立ち上がった。このシンポジウムにかかわった大学人ばかりでなく、直接にはこのシンポに参加しなかったメンバーもこの特設部会に数多く加わっている。シンポジウムを企画した趣旨の一つ、本学の地域貢献・地域連携に関して知見を共有する場が、組織として立ち上がったことは喜ばしいことである。

全国の大学でも数多くの研究者が学生を連れて地域に入っている。それらの諸活動についても、機会があれば知見を交換し、大学と地域との関係についての考察を深めていくことができればよいと期待している。